

名古屋能楽堂

九月定例公演

一部

〈能楽普及公演〉

二部



「^{たむら}田村」(喜多流)
シテ 長田 郷



「^{ゆうぜん}祐善」(和泉流)
シテ 佐藤友彦



「^{かぎつばた}杜若」恋之舞(観世流)
シテ 瀬戸洋子



「^{まつかぜ}松風」(宝生流)
シテ 玉井博祐



「^{がんかりがね}鴈雁金」(和泉流)
シテ 野村又三郎



「^{くれは}呉服」(金剛流)
シテ 田中春奈



「^{きんざつ}金札」(観世流)
シテ 武田大志



撮影：杉浦賢次



撮影：ウシマド写真工房

ご来場の方に抽選で
素敵なプレゼント!

本公演にご来場の方の中から
抽選で各10名様に能楽グッズを
プレゼントします。

※ご入場の際にお配りするパンフ
レットに応募券が入っておりま
すのでご確認ください。
(ご応募の締切は一部・二部各休演終了まで)

平成26年 9月7日(日) [一部]午前10時開演(午前9時30分開場)
[二部]午後2時開演(午後1時30分開場)

【「秀吉と能」一のふにひまなく候一】

文禄二年[1593]十月、秀吉は禁中において三日間にわたる能・狂言の会(禁中能)を催した。禁中においても能や狂言は長年親しまれてきた芸能であったが、特筆すべきは、天皇の御前で開かれたこの一大イベントの出演者たちである。三日間に演じられた能二十五番、狂言六番の出演者は、秀吉をはじめ徳川家康、前田利家ら武将たちであった。このうち、十二番のシテを秀吉がつとめ、狂言も一番演じている。能〈田村〉〈杜若〉〈松風〉〈金札〉は、この禁中能の三日目に秀吉が演じた演目、狂言〈祐善〉も禁中能で演じられたもの(演者は前田玄以・新庄駿河守)である。能の稽古を始め、演じる魅力にとりつかれてわずか十ヶ月、秀吉は、このような前代未聞の催しを実現させた。

主催



公益社団法人 名古屋市文化振興事業団 [名古屋能楽堂]

公益社団法人 能楽協会 名古屋支部

名古屋能楽堂 九月定例公演

(能楽普及公演)



第一部

能 田村(喜多流)

前シテ (重子) 長田 郷
後シテ (坂上田村丸の忠) 橋本 幸
ワキ (流儀) 橋本 幸
フキツレ (流儀) 藤波 徹
アイ (門前の忠) 竹市 学

地謡 松田 幸孝 粟谷 浩之
高林 昌司 高林 伸二
伊藤 英毅 粟谷 充雄

狂言

祐善 (和泉流)

シテ (世帯の忠告) 佐藤 友彦
アド (流儀) 野口 隆行
アド (所の色) 大野 弘之

仕舞

弓八幡 (金春流)

シテ 廣瀬 雅弘
小島 芳樹
鬼頭 尚久
加藤 英昭

能

杜若 恋之舞 (観世流)

シテ (杜若の花の詠) 瀬戸 洋子
ワキ (流儀) 杉江 元
笛 大野 誠
後藤 嘉津幸
大鼓 河村 総一郎
太鼓 鬼頭 兼命
村井 邦子
久田 三津子

地謡 星野 路子 高橋 瞭一
古沢 旭 祖父江 修一
八神 孝充 久田 勘助
近藤 幸江 武田 大志

第一部

能 松風(玉生流)

シテ (海女松風) 玉井 博祐
ワキ (海女村雨) 飯 斐 愛
(流儀) 飯 斐 愛
伴野 俊彦
アイ (浦人) 鹿取 希世

地謡 津田 節哉 佐藤 耕司
石森 智幸 衣斐 正宜
大森 尚人 辰巳 満次郎
玉井 道夫 和久 壮太郎

狂言

鷹雁金 (和泉流)

シテ (和泉の百鬼) 野村 又三郎
アド (摂津の百鬼) 佐藤 誠
アド (桑名) 井上 松次郎

舞離子

呉服 (金剛流)

シテ 田中 春奈
竹市 学
後藤 嘉津幸
大鼓 河村 総一郎
太鼓 加藤 洋輝

能

金札 (観世流)

シテ (天津太玉の神) 武田 大志
ワキ (下向の勸進) 高安 勝久
ワキツレ (随行の朝臣) 杉江 元樹
ワキツレ (随行の朝臣) 竹市 学

地謡 瀬戸 洋子 加賀 敏彦
今澤 美和 清沢 一政
本田 勲 武田 邦弘
松山 幸親 梅田 嘉宏

能解説

田村(たむら)
東国の僧が清水寺に参詣し、満開の桜に見とれて、童子が木陰を掃き清めているので、僧が寺の由来を尋ねると、大同二年、坂上田村丸により創立されたのがこの寺であると語り、さらに付近の清閑寺、靈山寺などの名所を教えているうちに音羽山から月が出来ます。桜月夜の風情を楽しむが、童子の様子が常人とは違ふと思ひ、僧が名を尋ねると、童子は私の名を知りたいなら私の行先を見よと言ひ、残し田村堂の中に姿を消します。中入僧が桜の木陰で法華経を誦しているところ、坂上田村丸の霊が武將姿で現れます。そして、田村丸が勅命により鈴鹿山の鬼神を討つべく軍を進めたとき、数千騎の敵勢に遭遇したが、千手観世音の助けがあつて敵を滅ぼした様子を語り消え去ります。

狂言解説

祐善(ゆうぜん)
旅の僧が都の油小路に差し掛かると、俄かに時雨が降り出します。近く、庵へ立ち寄り雨宿りをして、祐善と名乗る亡霊が現れて、自分を吊つてくれと頼み消えてゆきます。不思議に感じた僧は、近所の人に祐善の事を尋ねると、日本一下手な傘職人で、今日が命日だったと知らされ、《夢幻能》の様式・展開を狂言に取り込んだ作品で、登場人物はシテ・ワキ・アイの役どころに振り分けられ、舞も一つの見どころとなっています。類曲に「通圓」「蟬」「蛸」「桑阿弥」などがあり、能の演出を若干パロディ化した部分も見受けられます。

能解説

杜若(かきつばた)
諸国一見の僧が都から旅を重ねて三河国八橋へやってきました。沢辺に杜若の花が美しく咲いているので思はず見とれて、そこへ一人の里女が現れ、ここは八橋という古歌にも詠まれた名所であり、昔、在原業平が東下りの際にここで休み、「かきつばた」の五文字を各句の頭において「かころも きつづなれにし つましあはは はるばるさきめる たびをしぞおもふ」という歌を詠んだという故事を語ります。そして、杜若こそ在原業平の形見の花だと述べて、旅僧を自分の庵室・案内します。やがて女は初冠・唐衣に装いを改めて現れ、実は自分は杜若の精だと告げ、さらに「伊勢物語」や業平の恋愛事について語り、舞を舞い、やがて消えていきます。

能解説

松風(まつかぜ)
僧が西国へ下る途中、須磨の浦で、松風・村雨という二人の海士乙女の旧跡の松を見て、彼女達の菩提を弔います。日暮後、僧が塩屋に立ち寄り主の帰りを待っていると、二人の若い海士乙女が月夜に汐を汲み、塩焼き小屋に帰ってきます。一夜の宿を許された僧は喜びのあまり行平の歌を口ずさみ、松風・村雨の跡を吊ってきたことを話します。二人はさめざめと涙を流して悲しみ、実は自分たちこそがその二人の亡霊ですと打ち明け、行平の中納言に愛された思い出を語ります。語るにつれて松風の霊は恋慕のあまり狂乱し、行平の形見を身につけて舞い狂うが、妄執の苦しみから救われる為、僧の回向を頼み、夜明けとともに消えていきます。

狂言解説

鷹雁金(がんがかりがね)
毎年の慣習で、上頭(うへとう)である在京の荘園領主へ貢物の《初ガン》を捧げに向かう和泉と摂津の百姓が、道中偶々出会い同行の運びとなります。貢物を差し出す際に、同じ鳥の名を異なつた呼び名で取り次ぎの役人素者へ渡そうとするのでその理由を問われると、国向かいに位置する二人の主張を丸く治める素者の機転と、目出度く相舞(三段之舞)で舞い納めるといふ祝言も持ち合わせた演出は、ほかに「松標」「餅酒」などがあります。

能解説

金札(きんざ)
桓武天皇の命を受け勅使が神社造営のため伏見に赴くと、参詣に来た老翁が現れ造営に因んで木忌の歌を誦します。そこへ天から金札が降り、勅使が読み上げると、老翁は伏見のいわれを語り、自分は伊勢神宮の使者、天津太玉の神であると名乗り光の中に姿を消します。中入勅使が神のお告げを待っていると、天津太玉の神が本体の姿で現われ、弓矢で武徳を現わし、日本の国を寿いで神威を示し、社殿に入っていきます。観世流では前場を省略し祝言の能とします。

【第一部】午後一時十五分頃終了予定
【能】田村
日本語/米田真理(朝日大学教育学部准教授)
英語/藤江さおり(通訳ガイド)
【能】松風
日本語/伊藤利香(名古屋能楽堂イヤホンガイド)
英語/南谷みどり(能楽イヤホンガイド)
【能】杜若
日本語/大山純子
日本語/大子真由(能楽研究センター非常勤研究員)
英語/奥田小夜子(能楽イヤホンガイド)

【第一部】午後五時二十分頃終了予定
【能】松風
日本語/伊藤利香(名古屋能楽堂イヤホンガイド)
英語/南谷みどり(能楽イヤホンガイド)
【能】金札
日本語/大山純子
日本語/大子真由(能楽研究センター非常勤研究員)
英語/奥田小夜子(能楽イヤホンガイド)

チケット料金(税込み) 【一部・二部 各】

Table with columns: 指定 Reserved, 自由 Non reserved, 前売 Advance sale, 一般 Adult, 学生 Student. Prices: 4,100円, 3,100円, 2,100円.

*自由席のみ当日500円増
*事業団友の会 会員は1割引
*上演中の写真撮影・ビデオ撮影・録音は、事前に許可を受けた方以外はお断りください。

前売券取扱所 Ticket Office
名古屋能楽堂 TEL.052-231-0088
名古屋文化振興事業団チケットガイド TEL.052-249-9387
中京テレビ事業部 TEL.052-957-3333
栄プレチケ92 TEL.052-953-0777
チケットぴあ TEL.0570-02-9999 (Pコード 437-683)

